

宮崎県における外来魚類の記録

○小原直人・齊木悠亮（宮崎大学大学院農学研究科）・緒方悠輝也（宮崎大学大学院農学工学総合研究科）・村瀬敦宣（宮崎大学延岡フィールド）

外来種とは、国内外問わず人為的に導入された生物のことを指し、外来種による在来種に対する捕食・競争による影響が問題視されている。純淡水魚は、海を介した移動ができないことや地域固有性が高く遺伝的特徴が異なる事などの理由により、外来種や外来個体群による影響を受けやすい。特に宮崎県は純淡水魚の固有種の多様性が低く、外来魚の侵入を受けやすいと想定される。本研究では、宮崎県における外来魚対策の基盤情報の構築のため、これまでに報告されている県内の淡水域における外来魚類の記録を再検討するとともに、県内全域の 15 水系において調査した外来種の出現記録に関して報告する。

宮崎県内の淡水域における外来魚の野外調査は、2015～2022 年までの期間に実施し、魚類の採集には、主に手網・投網・さで網・釣りをを用いた。得られた標本・画像資料は、証拠資料として一部を除き公的な博物館に登録・保管した。

本研究では、国外・国内それぞれ 11 種と 12 種、合計 23 種の外来種が記録された。外来種の侵入可能な場所は一般的に以下のような特徴をもつ：1) 原産地と環境が類似している；2) 人為的な攪乱が多い；3) 在来種が少ない。宮崎県は、アユやヤマメなどの放流が行われてきた過去があり、これらの種の放流による上記 2) の人為的な攪乱の可能性がある。さらに、宮崎県の淡水魚類相は貧弱であるとされているため、上記 3) の特徴もよくあてはまる。以上のことから、宮崎県は、上記 1) の条件、すなわち各外来種にとって適した環境があれば、侵入・定着が容易であると考えられる。今回記録された種のうち、既に定着が確認されている種および上記 1) の条件を満たしていると考えられる種は、9 割以上 (21 種) であった。そのため、今後は行政等と連携してこれらの外来魚類の継続した生息状況の把握に努めると共に、在来種への影響に関しても調査・検討していく必要があるだろう。